

工藤量導

微

風

吹

動

揺るぎない焦点を囲む

明るい道と暗い道
狭間の小道を進むんだ
あなたが教えてくれたのは
楕円の夢の美しさ

(寺尾紗穂「楕円の夢」より)

「きれいな円になりましょう」。とある授業の一場面。手をつないだ生徒たちは迷わず真ん丸を作った。きっと互いに均等な力で引っ張り合つたのだろう。では、もし強すぎたり、弱すぎたり、それを上手にできない子が混ざついたら? ふと、みんなの輪に、当たり前にはじめない不器用な生徒の存在を思い浮かべた。

十年前ほど前、大正大学の先輩たちと共に、路上生活者を支援するボランティア団体「ひとさじの会」を結成した。現在にいたるまで浅草や上野周辺のホームレス状態のおじさんたちに手作りのおにぎりや医薬品を配る活動を休むことなく続けている。

東日本大震災から間もなく、寺尾紗穂さんというシンガーソングライターからひとさじの会宛に、『ビッグイシュー』というホームレス支援雑誌を応援するイベントが行えるお寺をどこか紹介してもらえないかと打診があった。それから毎年、浄土宗寺院である青山の梅窓院を会場に、誰もが「隣」の人と「輪」になり歌を楽しもうと「りんりんふえす」なる音楽イベントを催している。

二〇一四年のイベントのステージ上で、寺尾さんは仙台の知人から、『ビッグイシュー』を販売するおじさんが三年たつてもまだ路上生活を卒業できないけれど大丈夫だろうか、と問い合わせられたと話した。それに答えて、「アパートに入る=幸せ」というわけ

だ。若き日の法然上人は仏典を繰り返し読み、何度も何度も円を描き続け、誰もがきれいな円を描けるようになる方途を模索した。しかし、純粹な真円を描くには確固たる敬虔さが必要で、少しでも心乱れるような凡人にはあまりにも難しい。そうして幾千幾万もの円を描き暮れる日々のうちに、とうとうあの運命的な一文を、狭間を縫うような細い小道を見つけ出したのだ。

それは遙か時空を超えた中国の長安で善導大師が遺した『仏道をあきらめなくてよいもう一つの道』というまったく斬新な考え方だつた。猥雑で寄る辺ない私たちのために、お釈迦さまが希みを託して説きすすめ、阿弥陀さまがまるごと抱き迎えてくれる浄土への道。独りで円を描くのではなく、みんなで一緒に輪を作るのだ。

二人の想いが折り重なった夢の軌跡はどんな形だろうか？

強く引っ張る人も、力なくぶら下がる人も、ほどよく塩梅する人も、家のある人もない人も、あらゆる性別の人も、どんな隣の人も共に、法然さんと善導さんと手をつないで、阿弥陀さまとお釈迦さまという搖るぎない二つの焦点を囲む、いびつで、美しい橿円の輪。私たちの欠如や曖昧さをゆるすやわらかな月の光を浴びながら、二人の夢の続きをあきらめず、踊り、うたい継いでゆく。私はそんな宇宙に輪をかける橿円の奇跡を夢想したい。

でなく、路上で交流のあつた人たちとのコミュニケーションがなくなると、決して器用でない彼らはかえって孤独に陥ってしまうことがある。だから正解は必ずしも一つではなく、ある種の曖昧さも大事ではないか、そんなことを伝えたという。そして「橿円の夢」という新曲を披露する前にこう語りかけた。

「なぜ橿円かというと、円は中心が一つで、橿円は焦点が二つあります。その点と点の距離で、細長い橿円にもなるし、円に近い形にもなる。私はいろんな形、いろんな答えがあることがとても大切だと感じています。固定観念にとらわれてしまふのも、一つのあり方にこだわってしまうからではないでしょうか」。

寺尾さんの念頭には、高校の授業で習った、惑星の軌道が真円ではなく、実は橿円であると証明したケブラーの法則があつたようだ。当時のキリスト教の世界観では、神さまの作った宇宙や惑星の軌道は真円でできているという常識があり、それを科学的な観察によつて覆したのだ。仏教でも、仏の教えは円教といつて満ち欠けのない完璧で究極的な教えとされ、法然上人の時代も、円教を頂点に、それをを目指してひた歩むという考え方が一般的だった。

そのような見方からすれば仏道には自ずと二つの道が立ち現れてくる。真円たる仏の悟りを目指す道と、それをあきらめてしまう道